

4 出土遺物

(1) 土器・陶磁器

i. 西室およびその周辺の土器・陶磁器

I区からは、古代の須恵器・緑釉陶器なども若干出土しているが、全域で鎌倉時代から室町時代にかけての土師器皿が大量に出土した。胎土が橙褐色を呈する鎌倉時代の土師器皿の多くが全体の形状をとどめているのに対して、赤褐色や灰白色を呈する室町時代の土師器皿は、ほとんどが破片化している。

II区では、整理用コンテナに約80箱の土器・陶磁器が出土した。平安・鎌倉時代にまで遡る遺物も少数認められるが、多くは江戸時代のもので、特に土師器皿が目立つ。以下、主な遺構からの出土品について記す。

小土坑SP10441 須恵器の杯A（第32図1）・鉢（2）・双耳瓶（3）がある。土師器供膳具をとまわらないため、時期を細かく絞り込むことは難しいものの、1・3は奈良時代前半から半ばの操業と目されている加茂古窯跡群の西柵窯跡出土品に類品があり、2とともに8世紀代のものと見なして差し支えない。

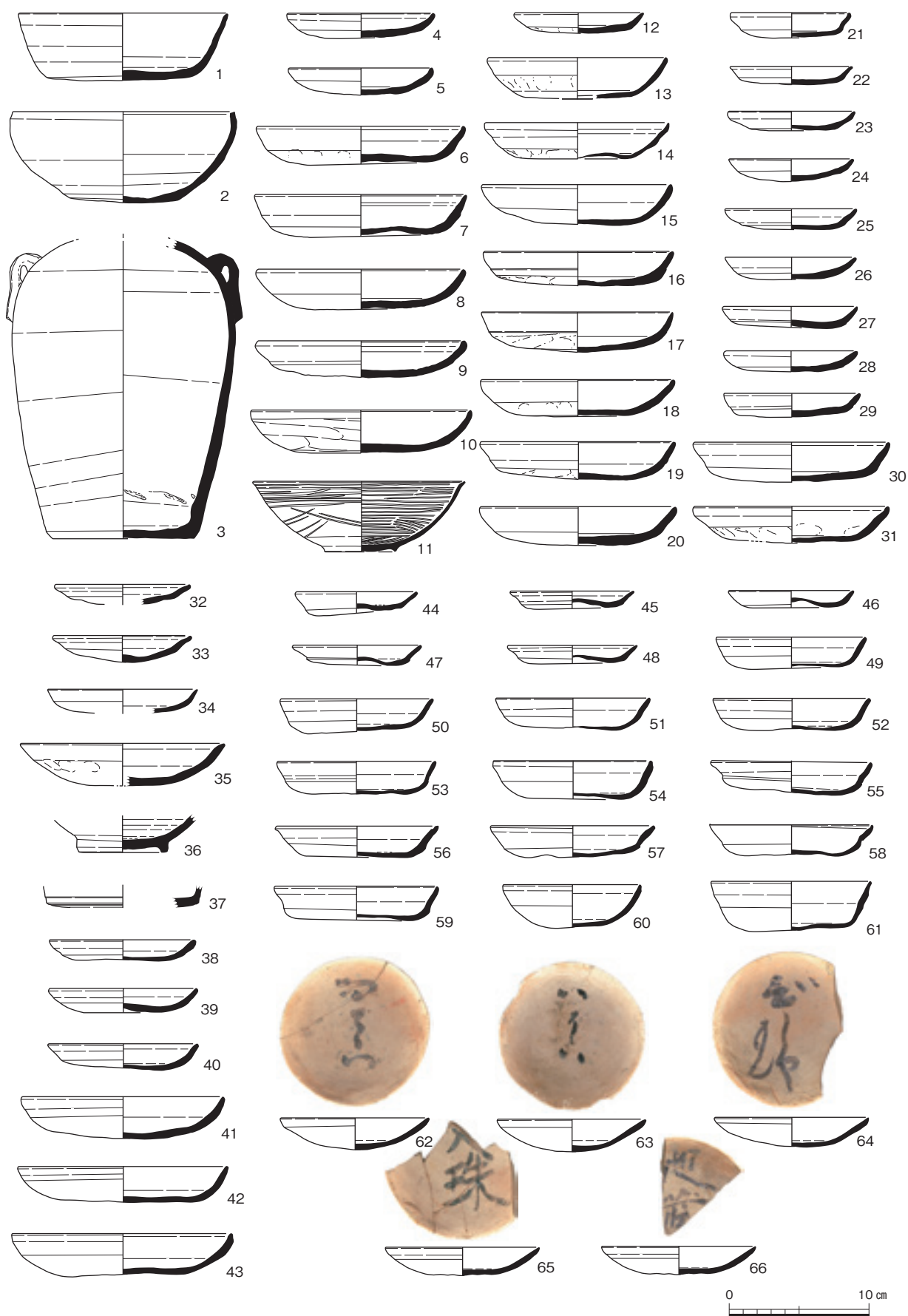
土器溜SU10446 ほぼ完形の土師器皿（4～10）多数に、少数の瓦器碗（11）がともなう。土師器皿は、口径15cm前後と口径10cm強の大小2群があり、量的には大皿が多い。大皿（6～10）は、口縁部外面に2段にわたってナデ調整が施されているのに対して、小皿（4・5）はナデ調整が一段しか施されておらず、灯明皿として用いられた痕跡の認められるものもある。10の大皿は、底裏および周辺にヘラ削りが施されている点で特異。伴出の瓦器碗は、薄手化している点に川越俊一氏の分類（川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐり、三の問題」『文化財論叢』同朋舎出版、1983）による第Ⅲ段階以降の特徴を見出すことができるが、口径は約15cmと大きめで、第Ⅲ段階A型式でも古相を示す。土師器皿と瓦器碗の特徴から、12世紀後半頃のものと考えられる。

土器溜SU10442 ほぼ完形の土師器皿（12～20）が多数出土した。胎土は橙褐色で、口径14cm前後の大皿（13～20）が多いが、口径9cm強の小皿（12）を少量含む。いずれも口縁部に一段のナデ調整が施されている。調整手法と口径分布から、13世紀前半頃のものと考えられる。

土器溜SU10443 土器溜SU10442と同様に、胎土が橙褐色の土師器皿（21～31）がほぼ完全な状態でまとまって出土した。形質的特徴の共通性から、SU10442出土品とほぼ同時期のものと考えられるが、大皿（30・31）よりも小皿（21～29）が多い点で異なる。

土坑SK10620 土師器皿（32～35）のほか、白色土器の碗（36）と緑釉陶器の小片（37）が出土した。土師器皿には、口縁部が「て」の字状とも形容される独特の形状を呈する一群（32・33）と、外反する一群（34・35）があり、後者には口径15cm前後の大皿（35）と口径11cm前後の小皿（34）が認められる。緑釉陶器（37）は器形を特定することが難しいが、内面が二次的に被熱しているように見受けられ、香炉の体部ではないかと推定される。土師器皿の形態的特徴から、11世紀末ないし12世紀初頭頃の遺物群と考えられる。

土坑SK10605 土師器皿（38～43）を主体とするが、少量の瓦器碗・皿をとまなう。土師器皿は、基本的に口縁部に二段のナデ調整が施されているもので、口径15cm前後と口径11cm弱の大小2群に法量分化する。SK10620出土品と比べると、概して口縁部が内彎する傾向にあり、後出的要素が強く認められるが、外反する口縁部を有する個体も少数含まれている。12世紀前半頃のものと考えられる。



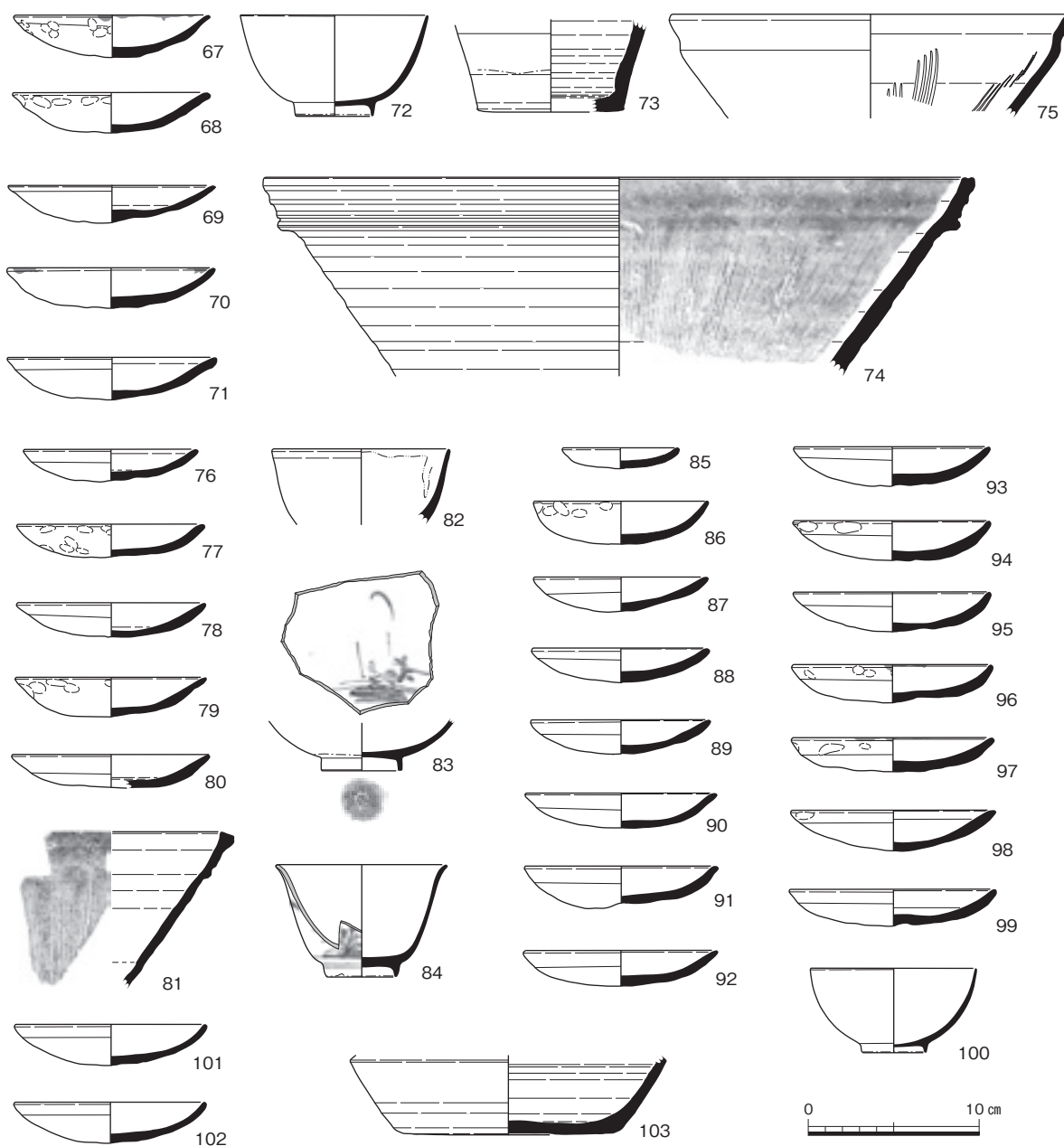
第32図 西室出土土器 (1) 1 : 4

円形土坑SK10600 南都（奈良）の中世土師器に特徴的な、赤褐色の胎土を有する皿（44～61）がまとまって出土した。径高指数（口径÷器高×100）25未満の浅手の一群（44～59）と、径高指数30前後の深手の一群（60・61）に大別でき、浅手の一群は口径9 cm前後と口径12 cm前後の大小2群に法量分化する。深手の一群にも口径10 cm前後の小型品（60）と、口径12 cm弱の大型品（61）があるが、浅手の一群と比べて極端に個体数が少ない。胎土の上で顕著な違いは認められず、いずれも口縁部外面に1段もしくは2段のナデ調整が施されている点で共通するが、深手の一群は全般的に丁寧に作られている。暦年代推定 material となる共伴遺物を欠くが、土師器皿の様相が近似する奈良市教育委員会平城京第559次調査SK638・639出土品（奈良市教育委員会『南都出土中近世土器資料集—奈良市高天町遺跡（HJ第559次調査）出土資料—』、2014）の中に、京都近郊産と目される土師器皿がともなっていることが手がかりとなる。SK638・639出土の京都近郊産土師器皿は、貞和元年（1345）に光明天皇から寺地を賜り、京都六条堀川に創建された本國寺の造営に際して埋められたと考えられる楊梅小路南側溝出土品（京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』、2012）との類似性が高く、概ね14世紀前半のものと考えられるので、SK10600出土土器についても、ほぼ同時期のものと考えることが許されよう。

土坑SK10613 口径11 cm前後の土師器皿（62～66）がまとまって出土した。元和年間（1615～24）頃の陶磁器が共伴した興福寺旧境内（平城第539次）SK10547出土品（石田由紀子ほか「興福寺旧境内の調査—第539次」『奈良文化財研究所紀要2015』、2015）と胎土・成形手法が比較的似ているが、口径が若干縮小している点でやや新しいと考えられ、17世紀でも半ばから後半頃のものと推定される。内面に、「みはい」（62）「いはい」（63）「びしゃもん」（64）「文珠」（65）「地藏」（66）といった墨書の認められるものを含む。墨書の内容からみて、仏事に使用されたものであろう。

方形土坑SK10630 4層に分かれる埋土のうち、ほとんど遺物を含まない③層を挟んで、下層の④層と上層の①・②層からの出土があり、複数個体で破片の直接接合が確認できた①・②層出土品については一括する（埋土名称は第17図参照）。④層出土品には、土師器皿（第33図67～71）、肥前地域産の白磁碗（72）、鉄釉壺（73）、信楽焼の播鉢（74）、瓦器播鉢（75）があり、①・②層出土品には、土師器皿（76～80）、信楽焼の播鉢（81）、肥前内野山窯系の緑釉陶器碗（82）、高台内に「富永」の印銘をもつ京焼風の肥前陶器碗（83）、肥前磁器の染付碗（84）などがある。67・70は灯明皿として用いられたらしく、口縁部に煤が付着している。①・②層出土の土師器皿は、口径がわずかに小型化している点に④層出土品よりも年代的に後出する要素を見いだすこともできないではないが、共伴した陶磁器に際立った年代差は認められない。①・②層から出土した信楽焼播鉢（81）、肥前地域産の施釉陶器碗（82・83）といった国産施釉陶器類は、宝永5年（1708）の大火にともなう整地層に覆われていた平安京左京北辺四坊穴蔵F1387出土品（京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京北辺四坊』、2004）と高い共通性を示しており、18世紀初頭頃のものと考えられる。なお、貼床下や重複（先行）する2基の方形土坑からも大量の土師器皿が出土しているが、形質的にSK10630の埋土出土品との間に顕著な差異は認められない。

土坑SK10634 ほとんどが土師器皿（85～99）で占められているが、肥前地域産の白磁碗（100）などをわずかにともなう。土師器皿の胎土は、概して緻密で、淡い黄橙褐色を呈するものが多い。法量的には、口径7 cm前後の小皿（85）、口径10.5 cm前後の中皿（86～93）、口径12 cm前後の大皿（93～99）に3区分でき、大皿の口径は方形土坑SK10630の①・②層出土品に近似するが、口縁部内面に残るナデ痕跡の幅が極端に狭くなっている点に違いを見いだすことができる。伴出の白磁碗も、SK10630④



第33図 西室および北円堂院出土土器（2） 1：4

層出土品と較べて全体に浅手で、高台も低くなっているなど、伊万里焼と呼ばれる肥前地域産の磁器碗としては、18世紀半ば以降の特徴を示す。

竈SL10637 埋土から、ほぼ全形を復元しうる土師器皿（101・102）が2個体出土した。形質的には、土坑SK10634出土の大皿との共通性が高いが、いずれも口径11.3cmと小ぶりであることから、やや降る時期のものと考えられる。

ii. 北円堂院の土器・陶磁器

Ⅲ区からは、整理用コンテナケースに30箱あまりの土器・陶磁器が出土した。瓦溜SX10659などから、中世に遡る土師器や瓦器の細片も出土しているが、江戸時代後期の土器・陶磁器が圧倒的に多数を占めており、特に土坑SK10651からの出土量が多い。SK10651からの出土品には、端反り碗など19

世紀第3四半期頃に位置付けられる国産磁器碗は少数しか認められないが、19世紀前半以前に遡ると考えられる肥前磁器碗・皿類や漆継ぎ補修痕をもつ器物がすこぶる多く含まれている。茶道具の水指や南紀男山焼の煎茶碗といった特徴的な遺物が目立つことから、日常の雑廃棄物とは考えにくく、明治時代初期に廃仏毀釈に関連してまとめて投棄されたものとみられる。

Ⅳ区からは、整理用コンテナケースに2箱分の土器・陶磁器が出土したのみで、燈籠据付穴SP10671から出土した須恵器（第33図103）以外にめぼしい遺物はない。103は、頸部を欠いているが平瓶とみられ、肩部に強い屈曲をもつ独特の形状から、奈良時代のものと考えられる。（尾野善裕）

（2）瓦磚類・土管

i. 西室出土瓦磚類および土管

西室の調査では古代から近代までの多くの瓦磚類が出土した（第3表）。軒瓦の出土量としては、中世のものがもっとも多く、次に平安時代、奈良時代と続く。奈良時代では軒丸瓦は6301A、軒平瓦は6671Aの出土が目立つ。6301A-6671Aは興福寺創建瓦であり、これらが創建西室所用の組合せである可能性が考えられるものの、奈良時代の軒瓦の型式はほかにもいくつか出土しており、断定はできない。また、平安時代以降の軒瓦も多数出土しているが、特定の型式には偏っておらず、西室で用いられた軒瓦の組合せは特定できなかった。以下、西室大房SB10450や掘立柱建物SB10440の年代を検討する上で重要と思われる軒瓦と土管について報告する。

軒瓦に関しては、遺構にともなうものと遺存状態の良いものを中心にあげた（第34図）。1・2は奈良時代の軒丸瓦。1は6301Aで興福寺創建瓦。2は6308Aa。平城宮所用瓦だが、興福寺や西隆寺な

ど寺院でも出土例がある。3～8は平安時代。

3・5・6は複弁蓮華文軒丸瓦。3は中房周囲に葉状の文様をもつ。6は外縁に鋸歯文と珠文をもつ。平安時代前期。4・7は単弁重弁蓮華文軒丸瓦。4は蓮弁の間に間弁をもつが、7は蓮弁のみで間弁をもたない。8は素弁蓮華文軒丸瓦。9・10は中世の「興福寺」銘軒丸

第3表 西室調査区（Ⅰ・Ⅱ区）出土瓦磚表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6234	Ab	1	6561	A	1	軒棧瓦（近世）	3
6235	F	1	6671	A	6	菊丸（近世）	3
6301	A	11		L	1	丸瓦（刻印）	26
	I	1		?	4	丸瓦（ヘラ書）	3
6307	J	1	6682	D	4	平瓦（刻印）	35
6308	Aa	1	6732	Fa	1	棧瓦（刻印）	1
奈良		4	6739	A	1	隅切平瓦	7
平安		21	6763	C	2	鬼瓦	1
古代		8	奈良		3	鬼瓦（平安）	3
鎌倉		2	平安		44	切鬘斗瓦（古代）	3
巴（鎌倉）		23	古代		6	切鬘斗瓦（中世）	2
室町		2	鎌倉		10	割鬘斗瓦（中世）	1
巴（室町）		4	室町		6	鬘斗瓦	3
中世		39	中世		47	面戸瓦	40
巴（中世）		92	近世		15	面戸瓦（古代）	5
巴（中近世）		9	時代不明		4	面戸瓦（中世）	3
近世		7				磚（線刻）	1
巴（近世）		15				雁振瓦	4
近代		1				伏間瓦	2
巴（近代）		1				鳥衾瓦	1
時代不明		9				棟飾?	1
						目板瓦	6
						隅木蓋	1
						瓦製円盤	2
						用途不明道具瓦	16
軒丸瓦計		253	軒平瓦計		155	土管	75
	丸瓦			平瓦		磚	凝灰岩
重量	682.7kg		1325.8kg		19.6kg	140.0kg	レンガ
点数	5292		15737		8	221	1

第4表 北円堂院調査区（Ⅲ・Ⅳ区）出土瓦磚表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	点数	型式	点数	種類	点数
平安	4	平安	3	軒棧瓦	11
中世	3	鎌倉	1	菊丸	5
巴（中世）	21	室町	2	丸瓦（刻印）	6
近世	7	中世	6	平瓦（刻印）	6
巴（近世）	46	近世	29	隅切平瓦	1
時代不明	6	時代不明	3	鬼瓦（中近世）	10
				切鬘斗瓦（中世）	5
				割鬘斗瓦（中近世）	5
				箱鬘斗瓦	4
				伏間瓦	4
				雁振	7
				鳥衾	2
軒丸瓦計	87	軒平瓦計	44	目板瓦	14
	丸瓦		平瓦		隅木蓋
156.01 kg	497.20 kg	0.37 kg	36.4 kg	瓦製円盤	1
468点	2074点	1	22	用途不明道具瓦	11



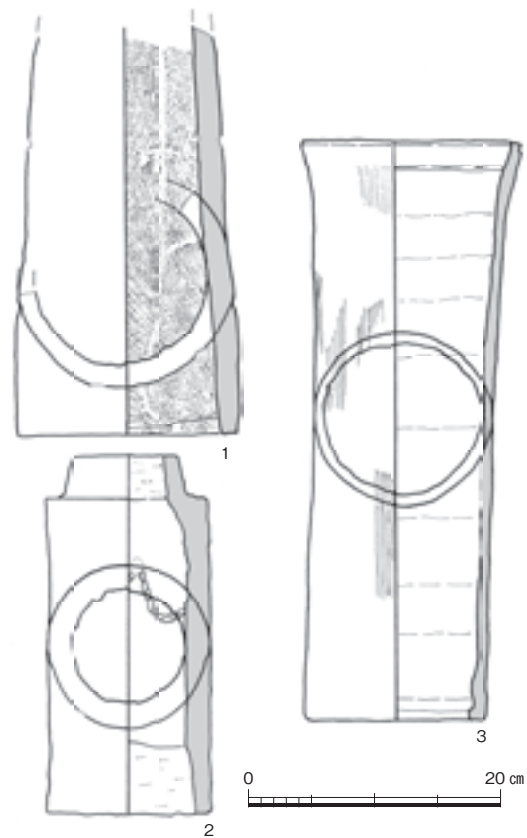
第34図 西室出土軒瓦拓本 1 : 4

瓦。9は鎌倉時代、10は瓦当中央に菊花文の刻印をもつことから室町時代のものである。11～14は左三巴文軒丸瓦。11・12には瓦当中心に珠点がある。平安時代末から鎌倉時代。13・14は鎌倉時代、15は鎌倉時代から室町時代。16は鎌倉時代の右二巴文軒丸瓦。17・18は奈良時代の軒平瓦。17は興福寺創建瓦の6671A。18は興福寺所用瓦の6682D。19～23は平安時代。19は外区に珠文をもつ唐草文軒平瓦。20は偏行唐草文軒平瓦で薬師寺や平等院で同范例がある（奈文研『薬師寺発掘調査報告』、1987）。21は中心飾りに四葉宝相華文をもつ重郭文軒平瓦。22は植物文軒平瓦。23は均整唐草文軒平瓦で中心飾りに菱形の文様をもつ。平安時代後期。24は鎌倉時代の「興福寺」銘軒平瓦。25は連珠文軒平瓦。鎌倉から室町時代。26～28は室町時代の均整唐草文軒平瓦で中心飾りに半裁した菊花文をおく。

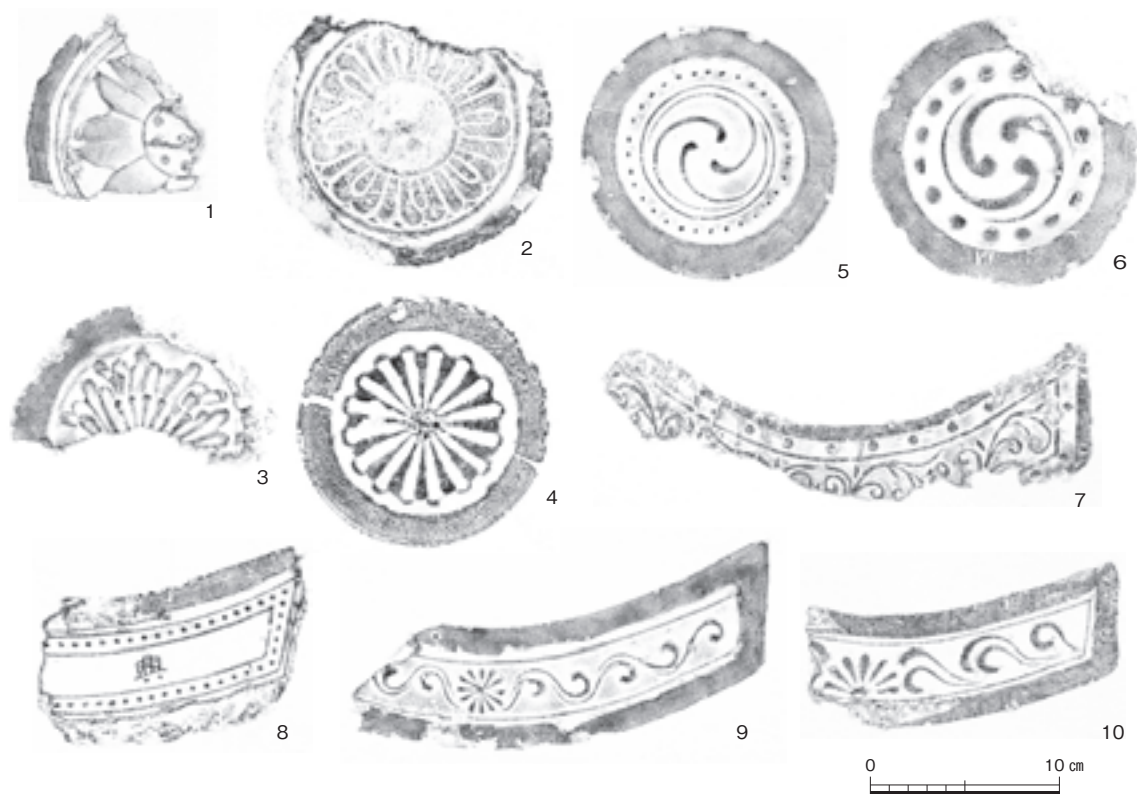
出土地点に関しては、3～5、12～14、20が西室大房SB10450の礎石抜取穴から出土した。SB10450礎石抜取穴からはここにあげたほかに軒瓦の小片が

出土しているが、すべて奈良時代から鎌倉時代にかけてのものである。また、掘立柱建物SB10440抜取穴からは16、土管暗渠SD10430からは25、同じくSD10430の土管抜取溝からは15が出土した。その他の遺構としては、2・6・17が土坑SK10621、9がSK10614、22・26が方形土坑SK10630、23が土坑SK10618、24が竈SL10638（竈内廃棄）、27が南北溝SD10434、28が土坑SK10439から出土した。それ以外は、8・11が中世以降の整地土から出土したほかは、すべて包含層もしくは表土から出土したものである。

次に、土管について述べる。西室では土管を用いた暗渠を複数検出した。土管は遺構ごとに異なった形態をもつ（第35図）。1は行基式丸瓦円筒土管（以下、行基土管）。粘土板を模骨に巻き付けて製作しており内面の布目は粗く、吊り紐はない。平安時代以前とみられる。土管暗渠SD10438出土。ほかにも行基土管は土管暗渠SD10435・10436で用いられる。2は玉縁式丸瓦円筒土管（以下、玉縁土管）。広端部内面を約5cmの幅で大きく削り、土管が連結しやすいようにする。内面には吊り紐痕が残り、吊り紐痕が布袋内面に通し縫いされていること、吊り紐の内外の比率が、1：5～1：7であることから14世紀中頃から後半のものであろう（山崎信二『中世瓦の研究』奈文研、2000）。このほかにも玉縁土管としては内面の吊り紐痕が玉縁部と胴部の2ヶ所あり、狭端内面を段状に削るものがある。2と同時期と考えられる。3は片側がソケット状の継ぎ手をもつ土管（以下、ソケット土管）で、丸瓦円筒を転用したものではなく、専用の土管である。粘土紐を巻き上げて作られており、外面にはカキ目をもつ。奈良市古市城で出土した16世紀の土管と形態や製作技法が類似しており、これと近い時期のものと思われる（奈良市教育委員会「古市城の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』、1989）。2・3は土管暗渠SD10430出土。SD10430では、玉縁土管とソケット土管とを混用しているが、玉縁土管列の中にソケット土管が部分的に入っており、後者が後世の補修とわかる。ほかにも土管暗渠SD10431には玉縁



第35図 西室出土土管実測図 1：6



第36図 北円堂院出土軒瓦 1 : 4

土管が、土管暗渠SD10432にはソケット土管が用いられていた。またSD10430・10431・10432には土管保護のために上面に丸瓦や平瓦が乗せられていた。これらの一部には室町時代の瓦の特徴である菱形や円形、菊花形の刻印が確認でき、掘立柱建物SB10440の廃絶年代を考える上で重要である。

ii. 北円堂院出土瓦磚類

北円堂院から出土した瓦磚類は第4表のとおりである。ほとんどが近世から近代にかけてのもので、古代のものはわずかである。特に土坑SK10651、SK10656からは近世から近代までの瓦が数多く出土した。

第36図1は素弁蓮華文軒丸瓦で平安時代。2は単弁八弁蓮華文軒丸瓦。平安時代後期。3は興福寺一乗院所用の一乗院華文で江戸時代初期のものである。4は十六弁菊文軒丸瓦。江戸時代。5は左三巴文軒丸瓦。内区の巴文が非常に細く、外区の珠文も小さい。6は右三巴文軒丸瓦。5・6ともに江戸時代。7は均整唐草文軒平瓦。東大寺式に似た文様構成をもつ。平安時代初期。8は興福寺銘文軒平瓦。西室で出土した第36図24に似るが、外区の珠文が小さい。鎌倉時代か。9は菊花唐草文軒平瓦。10は菊水文軒平瓦。9・10は室町時代。1が北面回廊基壇土にのる包含層、2が整地土。3・5・6・8・9がSK10656、4がSK10651、7がSK10656の上にある黒色土より出土した。(石田由紀子)

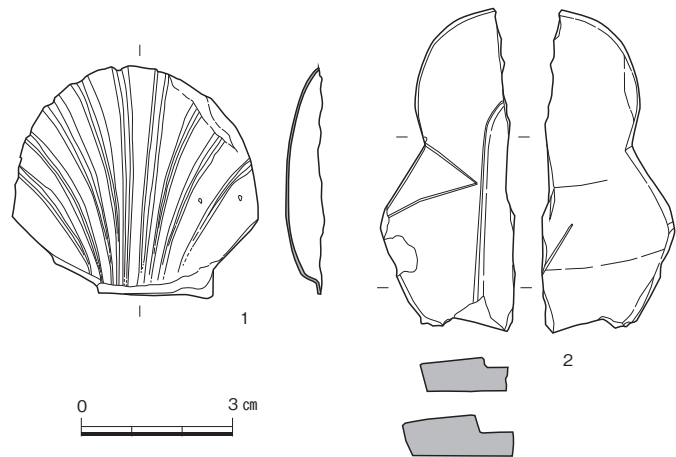
(3) 金属製品・銭貨

i. 西室出土金属製品・銭貨

鉄釘が103点、鉄鏝5点、鉄刀片2点などが出土した。鉄釘には、丸釘・角釘の両方を含む。角釘には方頭釘が3点みられるが、その他はほとんどが小片で頭部形状がわかるものはほとんどない。遺構に関わるものとして、土坑SK10618から鉄角釘2点、土坑SK10621から鉄角釘2点、円形土坑

SK10600から鉄角釘 1 点、SK10630から鉄角釘 2 点、鉄丸釘10点、SK10632から鉄角釘11点、鉄丸釘 2 点がある。鉄鏝は、表土からではあるが完形品が出土しており、長さ14.2cm、幅4.1cm。

また、Ⅱ区の基盤層上位の包含層からの出土ではあるが、銅製の垂木先金具片と思われる板状品が 1 点出土した。長さ約 3 cm程度で、全体形状は不明である。



第37図 出土金属製品・石製品 2：3

銭貨では、SB10450の礎石（二十一）の周辺で寛永通寶 6 点と北宋銭（崇寧通寶） 1 点が出土した。

ii. 北円堂院出土金属製品・銭貨

近世土坑群から鉄釘などが多量に出土した。遺構に関わるものとして、SK10651からは銅キセル雁首 1 点、青銅製貝杓子 1 点、鉄角釘 4 点が、SK10656からは鉄角釘28点、鉄丸釘 3 点、鉄鏝 5 点、鉄座金11点がある。第37図 1 は、貝杓子である。厚さ0.5mmの銅板を用いて、イタヤガイ科の貝殻を模して作られたものと考えられる。中央右よりに柄の緊縛用と見られる0.5mmの小孔を 2 つ穿つ。縦4.6cm、横5.0cm。貝杓子には貝殻をそのままを用いるものと金属製とするものの 2 種があり、銅製のものの類例として、東京都汐留遺跡（東京都生涯学習文化財団編『汐留遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター、2000）がある（これが貝柄杓であることとその類例については、國學院大學の阿部常樹氏よりご教示いただいた）。このほかに鉄角釘 3 点、鉄丸釘25点が出土した。いずれも表土あるいは攪乱からの出土である。

銭貨では、近世土坑群から延喜通寶 1 点、寛永通寶 3 点、琉球銭（世高通寶） 1 点が出土した。また、近世土坑群の上のの黑色土から一銭銅貨（大正11年、1922）が出土した。

（４）冶金関連遺物

Ⅰ区の土坑SK 10453 からは、鋳型片、銅取瓶片、銅滓、粒状滓、鍛造剥片などが出土した。これらの大部分は、埋土の水洗選別によって検出したもので、いずれも小片である。この周辺では表土からではあるが、坩堝片が出土した。また、Ⅱ区の土坑SK10613やSK10621からは褐色鉄滓片やガラス質鉄滓片が出土した。前章で述べたようにⅠ区東南付近では、西室大房再建に関わる、鉄鍛冶や鋳銅などの金属生産活動がおこなわれていたと考えられる。

（５）石製品

Ⅰ・Ⅱ区からは砥石片、石硯片、滑石製石鍋片（底部片）などが出土した。砥石はいずれも小片で、表土、包含層からの出土である。第37図 2 は石硯。粘板岩製で、上側辺部分が残存し墨堂の一部が認められる。下方に向かって厚みを増す。側縁部は連弧状に整形する。表面には墨痕が残る。西室大房SB 10450 南妻中央の「ハー」礎石抜取穴出土。（芝）

(6) 動物遺存体

Ⅲ区で検出した土坑SK10651やそれを覆う黒色土から、57点の動物遺存体が出土した（第38図、第5表）。土坑SK10651からは、マシジミ、アカガイ、ハマグリ、アワビ属、バイなどの貝類やマダイの歯骨、種は不明であるが鳥類の上腕骨が出土した。黒色土からもハマグリ、アカガイ、マシジミ、クロアワビ、アワビ属などが出土している。出土した動物遺存体は食用となる種ばかりで、鳥類の上腕骨には解体痕跡も多数認められたことから、食糧残滓と考えられる。貝類は大型個体が多いことが特徴的であり、殻長12.1cmのアカガイや殻長13.5cmのクロアワビも認められた。マシジミ、ハマグリ、アカガイは貝合わせができる個体も多く認められ、廃棄単位の保存性が高いことが示唆される。また、土坑SK10651と黒色土の動物遺存体は平面的に同じような場所から出土しており、様相も共通することから、同じ遺構に由来した資料群の可能性がある。

土坑SK6051は、北円堂院の北面回廊基壇を壊して掘られており、土器など遺物の様相から、19世紀第3四半期の廃仏毀釈にともなった廃棄物と考えられる。この頃の興福寺には、興福寺の僧侶だけでなく、明治政府の役人や藩兵も駐屯していた。例えば、明治維新期の興福寺僧・宗円の日記によると、興福寺境内の事例ではないが、慶応4年（明治元年、1868）8月17日の奈良府判事の新任歓待には、小鯛塩焼姿、はも、味噌汁などが夕飯に出されている（奈文研歴史研究室の吉川聡氏よりご教示いただいた。吉川聡『東大寺図書館所蔵 中村純一寄贈文書調査報告書』、2014）。今回出土した動物遺存体は、こうした廃仏毀釈の混乱の中で廃棄された食料残滓であり、当時の状況を物語る貴重な資料といえる。

（山崎 健）



第38図 Ⅲ区出土貝類

第5表 Ⅲ区出土動物遺存体一覧表

種名・部位名	土坑SK10651 (左 / 右)	黒色土 (左 / 右)
クロアワビ	0	1
アワビ属	1	1
バイ	1	0
巻貝種不明	1	0
アカガイ	3 / 3	6 / 2
マシジミ	6 / 7	2 / 1
シジミ科	3 / 0	0 / 2
ハマグリ	3 / 2	7 / 3
マダイ 歯骨	0 / 1	0
鳥類種不明 上腕骨骨幹部	1	0